

保育学文献賞を受賞して

私の研究の成り立ちとその周辺から

— 若い保育者たちへ —

高濱 裕子

この四月から現所属校に勤務しています。移籍からまもない時期に、思いがけない日本保育学会保育学文献賞受賞のお知らせをいただきました。私は平成の年号とともに研究の道を歩みだしていますから、今年でもう十四年になります。中年の大学院生であった私は、いろいろな局面で年齢という壁に突き当り、後戻りしそうになることがあります。それでも多くの人たちの援助によって、自分のやりたいことに取り組ん

でこられたと感謝しています。受賞対象となった『保育者としての成長プロセス』（風間書房）は、十年あまりにわたって取り組んできた研究をまとめたものです。本稿では、この本を構成する十一の研究に取り組む中で気づいたことや考えたことなどをまとめてみたいと思います。この時期はちょうど人生の転機ともかわっていますので、私的な内容に触れざるをえませんでした。最初にこのことをお断りしておきたいと思

います。

授与式での感慨

五月十九日におこなわれた保育学文献賞の授与式で、なつかしい津守真先生（日本保育学会会長）や森上史朗先生（同副会長）にお会いすることができました。なつかしいというのは私の個人的な感慨ですが、これには次のようないきさつがあります。

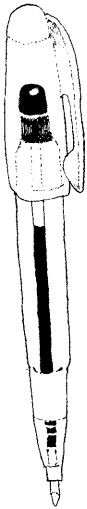
かつて、私は盛岡市にある公立幼稚園に勤務していました。昭和六十三年六月に岩手県国公立幼稚園協議会と盛岡幼児研究会の共催で津守真先生をお招きしました。当時の記録によると、この幼児教育講演会への参加者は二百六十名でした。講演会の後には有志とともに夕食をご一緒する機会もありました。授与式の舞台の上で、その場面が鮮やかによみがえってきました。その頃、森上先生は文部省初等中等教育局の幼稚園課教科調査官として指導的な立場にいらっしやいま

したから、お話をうかがう機会は何度もありました。

標記の『保育者としての成長プロセス』は、お茶の水女子大学に提出した学位論文を、平成十三年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）の補助をえて公刊したものです。学位論文の提出や審査のプロセスでは、予想もしなかった父の死というできごとにも遭遇しました。私の人生の中でもかなり大きなできごとが続けて起きたせいか、その時の記憶を連鎖的に想起してしまいます。

幼稚園教諭をめざしたいいきさつ

私は現在、乳幼児と親、そして幼稚園や保育所の保育者とその関連領域を研究分野にしています。これには父の影響が少なからずあるのかもしれませんが。



高校三年生の時、受験する大学の選択肢に短期大学の保育科も含めるように勧めたのは父でした。「これからは、幼児教育がとて重要になるぞ」というのです。この年は安田講堂事件のために東京大学の入試が中止になり、その余波が地方の大学にも及んできました。結局、唯一合格した保育科に入学することになったのです。

さて入学後に保育実習が始まり、私は「子どもって何て面白いんだろう！」と思いました。今でも「子どもが好きですか？」と聞かれれば、ちよつと困りません。嫌いではありませんが、手放しに好きとはいえません。でも文句なしに面白い存在なのです。子どもはこちらの思うようには動いてくれません。期待を見事に裏切ってくれます。「やられた！」と思うこともたびたびです。子どもの面白さのとりこになり、やがて子どもについてもっと知りたいと思うようになりました。

ドクターストップがかかったせいで、私は入園の決まっていた幼稚園にいけませんでした。弟たちの通う幼稚園に魅力を感じた私は、ある時期幼稚園に入り浸っていました。この頃から、すでに幼稚園とのつながりがあったのかもしれませんが。

保育の仕事が続けるためにはもっと学びたい

その後家政学部の児童学科へ編入学し、卒業後にはかつて学んだ短期大学の付属幼稚園に勤務することになりました。若さゆえの失敗は数々あります。熱心さのあまりこちらの考えを押しつけてしまい、保護者の反発を招いたこともありました。保護者の立場にたつてその心情を理解しようとする構えに欠けていたのでしょう。私自身の年齢が増えるにつれて、保護者会も恐怖の対象ではなくなりました。やがて、家庭では見ることのできない子どもの姿をできるだけ伝えていこうと心がけるようになりました。

保育所の先生方と意見の一致をみたことに、「子どもの最もよい場面を見ているのは、親ではなく保育者なのではないか」ということがあります。日々の子どもとの生活では、ほんの小さなことでも少し前に進んだ（何かができたということではありません）と実感できれば、明日からの生活に楽しみや期待がもてるでしょう。そのような様子を伝えて、保護者の子どもを見る視点を広げたり、子どものもっている多様な姿に気づいてもらうことも、保育者の重要な役割だと思っています。

さて、私は日々の保育がうまくいかないことを感じ始めていました。ある程度のことをこなせるようになって、も、「何かが違う」という感覚を払拭できないのです。保育の仕事が続けたのですが、この先ずっと続けていくためには「理論的なことを含めてきちんと勉強しなおす必要があるのではないか？」という思いも強くなってきました。それは中堅と呼ばれ

る立場になって、若い保育者への指導場面が増えたことも関係しています。自分のための勉強が必要なのに、後輩たちにはアドバイスを求められるという状況はかなりつらいものでした。「何とかしなければ……」と思うようになりました。

私は観察者？ それとも保育者？

大学院に入学を許可され（気持ちだけは熱かったのですが、結果は散々でした。よく合格させてくれたと思います）、大学の附属幼稚園に観察にでかけることになりました。現職の時はほかの人の保育を見たいと思っても、自分の所属する幼稚園を休みにするか、他の人に保育を代わってもらわなければ難しいことでした。これは願ってもないチャンスが到来したということです。三月までは現職だったという自負もあり、観察記録はバッチリ取れるだろうとたかをくくっていました。ところが、そう簡単ではないことがすぐにわか

りました。まず、記録が現実の展開に追いついていきません。でも、これは時間経過とともに解決されていきます。

実はもっと大きな問題が二つありました。ひとつは観察者に徹しきれないということです。子どもの動きにつられてつい出て行きそうになったり、知らず知らずのうちに子どもたちに問いかけたりしています。ハッと気づいてその場所から退き、自分で自分の動きをセーブするありさまでした。観察者としての自分が保育者としての自分をモニターしようとするのですが、制御しきれないのです。身体の方は十年あまりの保育行動をしつかりと覚えていて、無意識のうちに保育者として動こうとしたのでしょうか。

保育行動が違うのはなぜ？

二つ目の問題は保育行動の違いでした。保育者としての私ならここでは介入するという場面で、担任のS

先生は子どもたちを見守っています。逆の場合もあって、私なら出て行かないという場面でS先生は積極的に介入を試みるのです。「なぜなのだろう？」と考え始めると、よけいにわからなくなるのでした。

保育行動の違いに関しては、ある時解決策を思いつきました。それは実に簡単なことで、S先生に直接お聞きするというものでした。「あの時、先生はなぜ見ているのですか？」、あるいは「先生があの場面で介入したのはなぜですか？」という具合にです。

このことが、研究者としての私の保育に対するスタンスを決めていきました。不思議なことに、保育の世界では当事者不在の批判がしばしば行われています。例えば他の人の保育を見せていただいた後、その日の保育をめぐって討論になります。その時に「こうあるべき」というご自分の意見をいきなり述べる人がいます。まず当の保育者の意図、つまりどういうつもりでそうしたのかを聞く必要があります。はたから見えて納

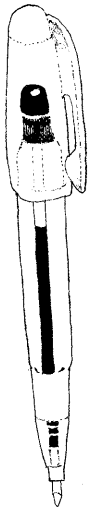
得できないとしても、当の保育者の話を聞かずに批判すべきではないと思うのです。その保育者がそのつもりで働きかけたとしても、スキルの未熟さゆえに思ったようにはいかなかったということもあるからです。人間が考えていること、実際にやったこと、そしてその結果（効果）は、必ずしも一致しないものです。

保育者のかかわりと子どもの状態

研究者の立場になって気づいたことに、保育者が考えている以上に、子どもは保育者とのやり取りからえたことを取り込んでいることがあげられます。保育者が実際にやっていたことを、数日たってから子どもたちが再現している場面に出会いました。その場にいるのは子どもだけです。保育者は知る由もありません。また、子どもの側で観察することによって、子どもの論理がとてよく理解できるようになりました。子どもなりに考えたり、試したり、決断したりした結

果が、突然ポツと保育者の眼前に示されたとしても、それまでのいきさつを知らない場合、保育者は中立的になることさえ難しいようです。しばしば子どもの行為は否定的に評価されます。遊びのうつろいややささが問題にされますが、子どもはうまく遊びたいし、仲良くしたいし、面白くしたいと動機づけられているのだと思います。だからこそ真剣に取り組み、本気で怒り、全身で表現するのでしょう。

その子どもの立場で考えることは、個人と集団の問題にもかかわってきます。その子どもの立場を理解したうえで、保育者がどのように対応するかが問われます。子どもの立場を理解したとしても、ここでは他児のことも考慮してほしいと願えば、保育者の対応は決まるでしょう。当の保育者はそのプロセスをきちんと



説明し、その上でどうあるべきかを議論すればよいのだと思います。

子どもの発達とその現場に立ち会うこと

私の研究は保育者と幼児の関係性の変化をとらえることも目的のひとつですから、必然的に少なくとも一年間、最も長い子どもでは三年間の追跡研究をしました。その結果、一人一人の子どもに発達のドラマがあること、そしてそのプロセスに保育者がかかわっているということを再認識しました。その子どもなりの発達課題もありますが、その中で子どもも保育者も成長していく姿がありました。時期の違いはあっても、どの子どもにも乗り越えてほしい課題が出てきます。保育者と子どもが一緒に歩むそのプロセスに、役には立たないけれど邪魔もしない観察者（私の観察の基本的態度です）として立ち会うことで、保育者の立場からは見えにくい保育の場のダイナミクスを、非常に強く

感じ取れるようになりました。

観察を受け入れていただいた場合、保育者との話し合いの中では私の気づきも率直に伝えるようにしています。観察を通しておつき合いするプロセスでは、お互いにうまいことばかりではなく、不都合も起きてきます。その不都合が実はとても厄介な問題で、すぐに結論を出せないこともありました。そのほかにも園全体の運営やクラス経営のこと、観察対象児以外の子どもものことなども相談のテーマとして持ち出されます。求められた時には、できるだけきちんと応えるようにしようと心がけてきたつもりです。

保育者は「へたにことばをかけると、子どもを傷つけてしまう」と消極的になりがちですが、もつと子どもたちを信用して思い切った保育行動をとることも必要なのではないでしょうか。保育者が常に完璧であるはずはなく、またある子どもにとって適切なかかわりが他の子どもには適切でないということもあるので

す。むしろ保育者には、自分がかかわった結果を読み取る敏感さが求められるのではないのでしょうか。「まじった」と感じたらいさぎよく退けばよいのです。

保育者を支援する体制とこれからの方向

保育がうまくいかない、適切な保育行動が取れないという場合、その人の適性や能力が取りざたされるのではないのでしょうか。「保育者に向いていないのでは？」とか「能力的に無理なのでは？」と批判される可能性が高いでしょう。でも本当にそうなのでしょう。

経験豊富な保育者が一定レベルの保育をすることは、周知の事実です。しかし経験を積み重ねても、誰もがそうなるわけではありません。経験を積んでも成長しない人、要するに停滞している人がいることも私たちは経験的に知っています。「経験って何だろう？」、「そして「経験によって、何がどう変化するのだろうか？」ということが、私の主要な研究テーマでし

た。保育者の適性が、しばしば「子ども好きで明るい性格」のレベルで語られることに納得できなかったのだと思います。人柄だけで語られるうちは、専門職とはいえないのではないかと考えています。

私の研究からは、保育者の経験年数によって関心を向ける課題が異なることもわかりました。保育者の発達によって、保育のメインテーマは変化します。そうであれば、研修のあり方と内容を検討する必要があります。つまり保育者のニーズに合わせて、継続的に、経験に応じて対応することが求められているのです。

保育をめぐる問題が、私が養成教育を受けた頃よりずっと複雑になっています。これからも子どもの成長にかかわるいろいろな立場の人たちと知恵を出し合い、より難しい課題に向かっていくことを求められる若い保育者への援助を続けていきたいと考えています。

(梶山女学園大学)